

今回のテーマは「時空を越えて」

時や場所を遠く隔てていても、人と人とが交流することは可能だろうか？
SFの世界の話ではない。タイムマシンに乗らなくても、今回紹介する二冊の本の著者はたしかに時空を越えて、過去を生きた人々とつながりを持ったようだ。



清少納言を求めて、フィンランドから京都へ

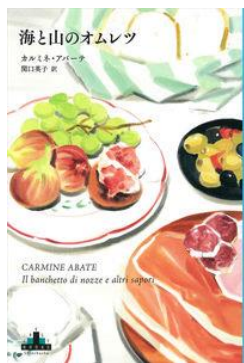
ミア・カンキマキ／著、末延 弘子／訳 草思社

大学の授業で作品に触れたことがきっかけで、以来十数年の間「枕草子」に魅了され続けている著者、ミア。彼女は清少納言を「セイ」と呼び、セイと自分とを重ね合わせて折に触れて思索にふけていた。彼女はフィンランド人。日本の古典文学の研究者というわけではない。日本語は全くできない。そんな彼女がある年、国の長期休暇制度を使って単身京都にやってくる。ただひたすら、京都に残る清少納言の影を求めて……。

吉田山の滞在先「ガイジンハウス」での個性的な同居人との交流や、京都の街を自転車で縦横に走り回って図書館や博物館や寺社を巡る、そんな日々の中での対話の相手は常にセイだ。

ヘルシンキ～京都、十世紀～二十一世紀、ミアとセイの二人は時空のへだたりを越えてたしかに魂を重ね合わせていたようだ。彼女は手探りで、現代の京都の街で清少納言を追いかけているように見える。フィンランドにいて、様々な資料を手にするにはできなかったのだろうか？読み進めるうちにふと湧いたこの疑問は、作品の終盤で明らかにされる。彼女にとって「これは地道に成し遂げるべきことだった。」

なぜならこの旅は、新しい自分自身を模索する旅だったから。彼女が滞在の最後に挑んだ、十二単を身に纏う体験と重ね合わせて彼女がそのことに気付いて行く描写が見事だ。



海と山のオムレツ カルミネ・アバーテ／著、関口 英子／訳 新潮社

「おいしそう！」この一冊の自伝的短編集の中に詰まった多彩な宝石のような料理の数々に、食いしん坊の読者はまず魅了されるだろう。次に読者は思う。これはどこの国の料理なのだろう？著者はイタリア人。しかしここにはわたしたちがよく知るような「イタリア料理」は一つもない。ではどこの？

著者の母語はイタリア語ではない。イタリア語は小学校で初めて習った。彼の先祖は、十五世紀の終わり、オスマン帝国の侵略から逃れて対岸のアルバニアからやってきた人々だ。彼らはアルバレシュ人と呼ばれ、アルバレシュ語を話す。現在もそのコミュニティは南イタリアに点在している。彼らはその独自の文化を大切にしている。とりわけ胃袋の記憶を……。

七歳の頃に食べた、祖母が作ってくれた「海と山のオムレツ」に始まり、村の婚礼での伝統料理、クリスマスのご馳走など、著者が描き出す半生は豊かな食の記憶に彩られている。それは同時に、個人的な記憶にとどまらない土地と人々の歴史であり、アルバレシュのコミュニティの現状なのだ。そのことを象徴的に、また効果的に表しているのが、全編を通じて登場する「アルベリア（アルバニアの古称）のシェフ」だ。雄弁に料理を語る彼の口上に耳を澄ませてみよう。食材の色彩に思いを馳せ、想像上の香りに埋もれてみよう。たとえそれが遠い異国の馴染みのないものであっても、わたしたちにはまったく別の、しかしながら本質的にはまったく同様の、胃袋の記憶があることに気付くだろう。胃袋を通じてわたしたちは時空を越えて過去とつながるのだ。